

釣れ釣れなるままに

2010年思い出の釣行記 PART. 2

癡しの釣り



鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第2回大会

☆開催日	平成22年5月9日
☆開催場所	寿都港～千走港
☆入釣場所	歌島平盤
☆釣果	ホッケ 380 mm 4/30
	カジカ 326 mm 1/1
	重量 262 0 g
☆成績	合計点数 968 点
	成績 6 位

防寒対策

週6日の勤務だが、勤務の割り振りは自分の役割なので、大会出発日の土曜日を休みとし、大会翌日も午後勤務とした。これで余裕を持って大会準備や後片付けが出来るというものだ。

準備が終わったリュックを息子に持たせてみた。大きな図体をしているがなかなか持ち上がらない。「こんな年寄りでもこの荷物を持って海岸縁を歩くのだ」というと「親父は普段はなまくらこいてソファーに寝そべってばかりいるのに、釣りとなるとシャキッとなるもんな。火事場の馬鹿力だ」と宣う。おまえには言われたくないとムツとするが、似たもの親子というところだろう。

今年は本当に寒い。5月というのにいまだ股引を放せないでいる。朝夕の冷え込みを考えると、冬支度が必要だろう。前回の大会で防寒着のチャックが壊れてしまった。スキーウェアを釣り用におろしてから20年間も使い込んで愛着があったが、チャックが壊れてしまっはしかたがないので廃棄処分とした。その代用を古ぼけたヤッケにした。これは内側にダウンが入っており暖かさは今まで以上だが、分厚くて体の動きがぎこちなくなる。

使い捨てカイロが無くなっていたので、釣具店で買おうとすると、置いていないという。大型ホームセンターに行ってみたが、大型はなく、ポケットカイロが売り残っていた。それでも無いよりましかと購入して、腿、腹、背中に各2個ずつ6個貼ったが、大きなものと遜色なかった。大会後、釣り用の衣類をまとめて洗濯機を回した女房が金切り声を出した。衣類の中に使い捨てカイロが1個紛れ込んでおり、カイロに入った砂鉄が洗濯機を壊してしまうというのだ。自分では念入りに剝がしたつもりだったが・・・。

念願の歌島平盤

前年度、歌島平盤に入釣する予定だったが、降り口を見失ってしまい下りることが出来ず、仕方なくワスリに向かった。今年度は目を皿のようにして何とか国道からの降り口を見つけることが出来た。脇道は舗装道路が続いており、キャスターに荷を付けて下って

いった。しかし、200m程進んだところから獣道のような所を進むことになった。ぬかるんだ凸凹道でキャスターの車輪が回らない。担ぐよりましかと引きずりながらようやくやっとの思いで平盤の根元にたどり着いた。歌島平盤は初めての場所なので、そこに一旦荷物を置いて、エンカマ等の様子を伺いにストックを突きながら下見してみる。



このような道なき道をキャスターで進むのは辛い。

竿の設置場所を確認してから荷物を取りに戻ると、同じ平盤を目指して進む釣り人が現れた。声をかけると竿道会の矢根氏である。入釣しようと考えていた左角に矢根氏が入ったので、私は右角で竿を出した。時たま波が乗ってくるので安全を考えて先端から下がって3本の竿を打

ち込む。すぐにホッケがパタパタときた。

天気予報では、波が1m未満となっていたが、現地ではうねりを伴った波が平盤に乗ってくる。矢根氏の所はさらに波が乗りやすくて30分ほどで場所を移動していった。平盤には荷物を載せるような大きな岩はなく、所々に30cm程の穴ぼこがある。釣った魚はフラスコに入れてその穴ぼこにつけ込んでいたが、波が乗ってくるたびに不安になる。大事なものは波の乗ってこない遠くに避難させているが、仕掛けや餌はすぐに必要となるのでどうしても近場となる。

大きなうねりを伴った波が平盤を襲った。後ろを振り返ると仕掛け等の入ったバツカンがひっくり返り中のものが流されている。慌てて走り寄ろうとすると、穴ぼこに足を突っ込んで前のめりに転んでしまった。膝をこっぴどく打った。とっさに出た手からは血が吹き出している。仕掛けは一つ一つビニル袋に入れてあるので問題はない。また、デジカメも海水に浸かっていたが、用心のためにビニル袋に入れていたので被害を免れた。プラスチックケースに入れた小物類は潮に浮いて漂っている。しかし、予備のリールやヘッドランプが海水に浸かった。しかもコマセ入れバケツに海水が入ってしまったのでドボドボである。エサバツカンもひっくり返って、エビやホタルイカが流された。イカゴロはかろうじて近くの浅い所に沈んでいる。それを目ざとく見つけたカモメが周囲にたむろし、様子を窺っている。カモメと競争しながらエサを拾い集めることとなった。ホッケが湧いてきた。流されたコマセが効いてきたのだ。中投で小カジカが釣れ



だが、これが嫁になるのだろうか。ホッケばかり釣っても芸がないので、遠投するが小さなアタリで根掛かりを繰り返す。本日は、「北海道名人会」の佐々木忠義氏にオブザーバーとして参加して頂いたが、彼が言うには本日のアブラコはホッケのアタリと見間違ふほどの小さなものだったというから、アブラコだったのかもしれない。

佐々木氏は下見と称して軽い気持ちで参加したとバツカンと竿だけを持って釣り場に向かっていったがアブラコを大釣りして優勝をかつさらっていった。名人会、さすがである。

審査結果

優勝	佐々木忠義	1410点	(アブラコ486mm+ホッケ 440mm+4840g)	床丹
準優勝	嵐光博	1231点	(アブラコ429mm+カジカ 360mm+4420g)	矢追
3位	堀内正博	1192点	(カジカ 394mm+アブラコ380mm+4200g)	大阪ドラ
4位	山岸伸	1058点	(アブラコ447mm+カジカ 365mm+2460g)	豊浜平左
5位	吉井博	1051点	(アブラコ371mm+カジカ 366mm+3140g)	矢追
身長優勝	大前健治	1292点	(ホッケ 461mm+アブラコ425mm+4060g)	歌島川



身長優勝の大前氏。どれどれいいホッケだ。鹿島釣狂を抜いてホッケ身長歴代1位に君臨だな。

☆釣行日 平成22年5月16日(日)・17日(月)

☆入釣場所 寿都政泊平盤・瀬棚漁港

☆釣果 ホッケ 380 mm 80ほど

カジカ	350	mm	1
クロガシラ	300	mm	3
ソイ	200	mm	2
サクラマス	540	mm	1

ホッケ爆釣とサクラマス

釣りにはあまり興味の持てない息子を誘うと、何を考えたかについていくという。それで寿都方面でホッケのウキ釣りをメインとし、ワスリでのソイ、大平湾洞でカレイの投げ釣りを楽しもうと1泊2日の計画を立てた。「釣りしん北海道」では苫小牧西港で大物クロガシラが釣れだしたとの記事があり気持ちが揺らいだが、この時期ホッケに的を絞っておけば息子にも某かの釣りものはあるだろう。

16日(日)6時に目を覚ます。息子の部屋に行くとすぐにでも出発できるという。準備は整えてあったので、岩見沢から高速を使って一路寿都に向かう。運転は息子に任せているのでのんびりと出来る。10:30には寿都に着いてしまった。昼飯にはまだ早く、寿都周辺の磯を見て歩く。

寿都漁港では「北海道名人会」の大会を終えた金井泰樹氏がバス待ちをしていた。様子を伺うと白灯台の右に入ったがこれといった釣果がなく、この周辺では山崎栄氏がよい釣りをしたとのことで、失礼ながら山崎氏のバックンを覗かせていただく。型のよいアブラコ、カジカが収まっていた。矢追町方面に車を走らせると、「北の釣り会」の沢田隆郎氏、金山泰三氏がバス待ちをしていたので釣果を伺うと、白灯台左に入った澤田氏はそこそこで、相棒の金山泰三氏がいい釣りをしたようだ。やはりバックンを覗かせていただいた。

弁慶岬をかわすと、ホッケの浮き釣りで名高い政泊平盤に釣り人がたくさん入っていた。駐車帯にけっこうな車が駐めてあり、上がってきた釣り人に聞くと、大物はいないが数はそこそこ釣れたとのことである。



寿都弁慶岬政泊平盤 比較的なだらかな勾配の坂道だがメタボの息子にはきつそうだった

岩場の先端ではサクラマスを狙ったルアーマンが並び、溝の根元の方はホッケを狙った浮き釣り師で占められている。その中間辺りに二人分のスペースが空いていたので荷物を下ろした。時々うねりが先端の岩を乗り越えて足元を洗うが問題はなさそうだ。

磯竿に仕掛をセットして、ホッケを1匹釣ったところで竿を息子に渡す。息子は未だに、私が道具をセットして手渡してやらなければならないいわゆる殿様釣りなのだ。最近ようやくイソメをハリに刺すことが出来るようになった程度の初心者である。エサがオキアミならどうってことはなく、すぐにホッケを釣り上げた。しかし、ホッケに飲み込まれたハリを外すのに手間取っている。ホッケが藻掻き苦しんでいるのに耐えられないという素振りなのだ。私も少年の頃は同じような思いをしたが、今ではハリスを傷つけないようにとジタバタしている魚のエラ蓋を切ってハリを取り出すことに躊躇することはない。指を口に突っ込んで外す方法を教えたが、ホッケの口に息子の太い指が入らないので難儀しているようだ。私は5.4mの延べ竿に赤のインジケーターを3個つけた仕掛を流す。二人ともほどよいペースでホッケを釣り上げていく。

息子がタイが釣れたとはしゃいでいる。思った通りそれはタナゴだった。そして、私にホッケとは明らかに違う食い込みが出る。体高のある銀箔色の魚体がギラッ、ギラッと海中を疾走する。隣の浮き釣り師が「アメマスだ」と叫んだがアメマスとも違うようだ。2号の磯竿が根元まで湾曲して、道糸がキーンと唸りを上げる。ハリスは1号だ。一度寄せた魚がドラグを鳴らして沖へと疾走する。それを2度、3度と繰り返す。とてもじゃない



が上げられそうにない。手こずっていると、遠くで竿を振っていたルアーマンが気づき大きなネットを持って駆けつけてくれた。何度かのやりとりの後で魚も疲れていたのか、彼がネットを差し出した時には頭からすんなりと収まった。彼には何度も丁寧に頭を下げる。

メジャーを当てると5.4cmを指している。サクラマスの上顎に4号のチヌバリがきれいに貫通していた。それで1号のハリスも無事だったのだろう。



体高のある魚体だ。見る間に鱗が剥がれていく。背後で竿を振っているルアーマンに取り込んでもらった。

「テックイ」 もいいんでないかい

一旦アタリは途絶えたが、棚を深くするとまた釣れだした。マキエを撒き続けているとホッケが浮き上がり群れをなしてマキエを喰いあさっているのが見える。息子は「1匹でも釣れば満足だ」と思っていたようで、大釣りに飽きてしまった。釣り大会ではないので時間にも余裕があり、ホッケの頭と尻尾をハサミで切り落として処理し、途中コンビニで氷を買ってクーラーに詰め替える。さすがにサクラマスは魚拓にしようと処理はしなかったもので収まりずらく、無理矢理押し込むことになった。午後5時には、海岸線を下見しながら瀬棚に向かった。

私は瀬棚港での釣り経験はないが、釣り大会では瀬棚港最内川のアカハラで優勝するパターンが多いので見学をする。最内川周辺を見渡せる岸壁の角では昨日から釣りをしていて、明後日までねばるといふ釣り人がいた。釣果は上がっていなかったが土日月火と3泊4日の釣行で羨ましい限りである。

午後8時、瀬棚町の「富美栄寿司」で遅い夕食をとる。運転は息子に任せてあるので私はジョッキーで祝杯を挙げる。ビールだけでは飽きたらず日本酒にまで手を出してしまう。夕食後は東防波堤とフェリー埠頭の間にある舟揚場横で二人合わせて6本の竿を出す。ポツンポツンとソイ、クロガシラ、ホッケが釣れたが、日をまたいでしまったので、竿をそのままにして車で眠った。

午前4時起床。ふと見ると竿がきれいに並んでいない。そっと上げてみるとカジカとホッケのダブル、アカハラのダブルだったり、ソイやクロガシラだったりした。その後は釣れそうもないので明け方の移動を考えると、車のガソリンは底を切っており、ガソリンスタンドが開くのが8時だという。退屈しのぎでおにぎりをつまみにしてまたまた缶ビールを飲む。本当に今回の釣行は酒三昧だ。

磯舟の出入りに注意しながら竿を振り込んでいると、漁から帰ってきた磯舟を洗いながら漁師の方が「テックイがあがった」と大きな声で話をしている。近寄ってみるとまさに大ヒラメである。そう言えば、ここ瀬棚には道の駅「てっくいランド大成」があったはずだ。瀬棚港最内川周辺の投げ釣りでヒラメがあがったという記事を見たことがある。「テックイ」とまではいかななくてもヒラメの顔を拝むことは出来ないだろうか。

8時まで粘ったが結局、テックイの代わりに30cmほどのクロガシラを追加したのみで帰途につくことになった。テックイはこの次の機会に譲ることにしたのだ。



サクラマスを魚拓に刷る。一回できれいに仕上がった。